

韓国の社会福祉事業

——木浦共生園——

宇都宮 みのり

はじめに

木浦（モッポ）は、韓国の西南部に位置する全羅道（チョルラド）にある港町である。ここに尹致浩（ユン・チホ）が創設し、田内千鶴子が守ってきた共生園がある。日本人でありながら「韓国孤児の母（オモニ）」として木浦市民に慕われた田内千鶴子の足跡を求めて、2018年10月28日に共生園を訪ねた。鄭愛羅（チョン・エラ）園長は、田内千鶴子生誕100周年を機に動き出した「World Orphans Day（国連世界孤児の日）」制定推進のための「ニューヨーク世界大会」（2018.10.14-16）に、共生園の子どもたちと共に参加してきたばかりであると、気持ちが沸き立つようなお話をしてくださった。2019年には、尹致浩生誕110周年、共生園設立91周年にあたり、記念追悼会や祝賀会が開かれている。

生涯にわたって日韓の心の交流を願った日本人女性の存在を共生園の歴史とともに学んでもらいたいと、来たる2020年2月11日に、ソウル基督大学と本学との交流プログラムの一環として教育福祉学部の学生6名を引率して再び訪問する予定である。前回訪問から日が経ってしまったが、田内千鶴子と共生園について整理しておきたい。

1. 共生園の概要

- ① 種類：養護施設
- ② 運営主体：社会福祉法人共生福祉財団
- ③ 園長：鄭愛羅
- ④ 設立日：1928年10月5日

- ⑤ 設立者：尹致浩
- ⑥ 所在地：韓国全羅南道木浦市竹橋洞
- ⑦ 目的：保護者のいない児童、その他環境上養護を必要とする児童を入所させ、キリスト教精神に基づき、将来健全な市民として自立できるよう保護・育成することを目的とする。また、社会福祉を通して日韓友好の懸け橋になることを使命としている。

（「案内パンフレット」より）



写真：木浦共生園案内パンフレット



写真：木浦駅前

2. 尹致浩と田内千鶴子のこと

尹致浩は、1909年に全羅南道に生まれる。共生園は1928年、尹致浩が19歳の時に橋の下で寒さに震えながらたき火をしていた7人の孤児¹⁾と生活を共にしたのが始まりとされる。子どもたちと暮らす家を、共に生きるという願いを込めて「共生園」と名付けた。養護を要する孤児たちは日ごとに増えていき、木浦市民たちは尹致浩を「乞食大将」と呼んだという。木浦市は韓半島を鉄道で南下した終着駅に位置する港町である。気候にも恵まれており、最後にたどり着いたこの地で子どもを遺棄する親が多いと聞く。ゆえに木浦市民は「彼の言動から“超人”を感じた。同じ普通の人間であるはずなのにどうしてそんなに純粹でいられるのか」と優しい眼差しを送っていた(尹2018)。そんな尹致浩は「笑わない孤児たちに笑顔を取り戻してあげたい」と日本人教会の高尾益太郎に相談し、そして高尾の紹介で、音楽教師であった田内千鶴子と出会う。



写真左：尹致浩と
草創期の
共生園



写真右：田内千鶴子
と共生園の
子どもたち

田内千鶴子(韓国名：尹鶴子)は1912年、高知県若松町で生まれる。朝鮮総督府の木浦府庁の官吏であった父が家族を呼び寄せ、千鶴子は7歳の時に木浦に渡る。木浦高等女学校を卒業後、韓国人女子に中等教育を行う唯一の学校であった木浦貞明女学校にて音楽教師として働いた。千鶴子

は一時体調を崩すが、健康を取り戻した1936年5月に尹致浩と出会う。その年、女学校を退職し、共生園への奉仕を始めた。

1938年に2人は結婚する。当時の共生園は電気も水道もない粗末な小屋であったというが、「強い信仰心と人間愛」を貫く尹致浩に千鶴子は共鳴し、夫と共に孤児たちに愛情を注いだ。

日本の敗戦で植民地時代が終わり、韓国は独立を果たす。韓国国内で排日感情が激化する中、千鶴子は一時高知に引き揚げられるが夫と孤児への思いからすぐに木浦へ引き戻った。「すべての日本人が引き上げてしまった後も韓国に残り共生園で子どもたちと過ごす」決心をする。

その後1950年に朝鮮動乱が勃発した。それによって孤児・棄児・浮浪児・避難民の数がふくらみ、共生園の子どもたちは500名を超えた。栄養失調と病気のため毎日のように子どもたちが亡くなったという。このような中、尹致浩は子どもたちの食料調達に出かけたまま、1951年に光州にて消息を絶った。戦争によってますます孤児が増えていく中で、千鶴子は夫の生存を信じ、夫が帰るまでは、と一人で共生園を支えることになる。「日本人ただ一人、茨の道」(尹2007)を歩み始め、激動の1950から1960年代に3,000人の子どもたちを育てあげた。

千鶴子は、病によって1968年、56歳という若さでこの世を去った。死の間際に日本語で「梅干しが食べたい」と言ったことが、韓国で最善を尽くした千鶴子のように在日の韓国・朝鮮人にも日本での最後に祖国を感じてもらいたいとの思いにつながり、現在の日本の高齢者施設「故郷の家」建設に結実したことは知られている。千鶴子の葬儀は、木浦市開港以来初の市民葬として営まれた。市民葬には3万人もの人びとが参列し、民族の違いを超えて韓国孤児のために生涯を捧げた一人の女性の死を悼んだ。

その献身は「韓国孤児の母」と敬われ、1963年に日本人として初めて異例の「大韓民国文化勳章国民賞」が贈られた。追って1967年に日本政府から「藍綬褒章」を、1969年に日本国天皇か

ら「勲五等宝冠章」を授与されている。

3. その後

千鶴子が亡くなった後の共生園は、千鶴子の長男である尹基氏が継いでいる。尹基氏は現・こころの家族理事長であり、韓国では尹鶴子共生財団、共生福祉財団を、日本では社会福祉法人こころの家族を発展させ、5か所の「故郷の家」を開設している。

おわりに

尹基氏は、一般の人がもっと孤児の現実を知り、市民社会の役割に関心を持つべきと訴える。「孤児の悲しみは、どこに行っても共通しています。孤児たちには、家族のだんらんも、食卓を囲む楽しさありません。場合によっては、自分の本当の名前も知りません。いくら努力しても、社会の冷たい壁に阻まれます。悲しいことがあまりにも多いのです」（尹 2012）と。

若い学生が、尹致浩と田内千鶴子の人生から二国間の不幸な歴史を学び、同時に、孤児がいない社会を目指して今に引き継がれている千鶴子の精神を理解し、現実への行動を起こすことを期待し、再訪したい。



写真：共生園入口



写真：尹夫妻の「愛の泉」の碑



写真：共生園 20 周年記念碑



写真：オモニの碑

注

- 1) 尹基氏は、社会的援護を要する子どもたちは世界的に増加しているにもかかわらず、最近「孤児」という言葉を使わない風潮がある中、言葉が消えることが孤児への無関心につながることを危惧し、「孤児」という言葉をあえて用いているという（尹基「韓国孤児の母・田内千鶴子生誕 100 周年記念及び国連 World Orphans Day（世界孤児の日）制定推進大会」より）。その意思を尊重し本稿でも「孤児」という言葉も使用した。

引用・参考文献

- 『木浦共生園案内パンフレット』非公刊
 木浦府編（1930）『木浦府史』木浦府
 産経新聞「日本人の足跡」取材班著（2001）『日本人の足跡〈3〉』扶桑社
 田内千鶴子生誕 100 周年記念事業会「田内千鶴子さんと木浦共生園」「韓国孤児の母・田内千鶴子生誕 100 周年記念及び国連 World Orphans Day（世界孤児の日）制定推進大会」http://www.chizuko100th.com/who_chizuko.html
 田内 緑（2012）「韓国と日本を結んだ愛と共生の架け橋 韓国孤児 3000 人を育てた生涯 木浦の母 田内千鶴

- 子」田内千鶴子生誕100周年記念事業会『田内千鶴子生誕100周年記念事業報告書』社会福祉法人こころの家族、pp. 1-2.
- 尹 基 (2008)「韓国孤児の母 田内千鶴子の福祉のこころ—木浦共生園から故郷の家まで—」淑徳大学大学院 (2008)『淑徳大学大学院国際学術フォーラム報告書』淑徳大学大学院、pp. 459-466.
- 尹 基 (2012)「国連「世界孤児の日」制定を目指して」田内千鶴子生誕100周年記念事業会『田内千鶴子生誕100周年記念事業報告書』社会福祉法人こころの家族、p. 4.
- 尹 基 (2018)「共生主義者～玉洞里尹致浩記念碑」尹基編「月刊福祉交流通信 こころの家族」322号、p. 1.
- 不明 (2013)「“海辺の聖女” 尹鶴子生誕101周年に考える韓日」尹 基編「月刊福祉交流通信 こころの家族」294号、p. 4.
- 不明 (2018)「尹致浩生誕110周年 木浦に集う」尹 基編「月刊福祉交流通信 こころの家族」330号、p. 2.
- 不明「共生福祉財団80年の歩み」社会福祉法人「故郷の家」ホームページ <http://www.kokorono.or.jp/tiduko/kyousei80.html>